

人橋を架ける

当「起業アドバイザー便り」も本号で117号になりました。こん日まで折にふれ、このアドバイザー便りをスタートさせた発端を伝えてまいりました。

2005年11月が第1号でしたが、当時の世の中は景気低迷期で世間には長らく蔓延している「失われた20年」の閉塞感が漂っておりました。ですから起業を通してこれから自らの人生を切り拓くべく挑戦魂を燃えたぎらせている若い人達に対して、大いに期待したいものと思ったからです。狙いはそもそもその入り口たる起業の初歩的なことから、幅広くアドバイスするためでした。

こうしてともかく心に期した区切りの10年120号を間じかにして、自分が発案し、幸いなことにそれを継続して来て、その幕引きの時期を迎えることが出来ている昨今、考えることが多々あります。

当初は10年の継続しようとの強い意志はなく、ただ私自身がこれまで何か新しいことさらに挑戦し、それを成し得てから自分のものにするには経験上10年は継続しないと分からないとのことでした。また予想外のことに2013（平成25）年の夏に、法令出版社より「起業いろは塾」—新しい自分の形 独立・起業への挑戦—の冊子を世に出すことが出来ました。

最近よき文章（詩）にめぐりあいました。

この詩の意図するところは、老いた白髪の旅人が深くて広い谷をようやく渡り終えた。その旅人はそのまま歩みを進めることなく、夕暮れになっても後の人のために橋を架ける作業に没頭している。

もう二度この道を通ることもないのになぜですか？との人の間に対しての回答が詩の一部となっております。

「良き 友よ、
わたしが歩んで来た道には、
わたしの後に続く若者がいる。
彼もこの道を通らねばならない。
わたしには何でもなかったこの谷も、あの金
髪の若者には
危険な落とし穴となるかもしれない。
彼もまた薄暗いたそがれの中で
渡らねばならない。
良き友よ、わたしは彼のために
橋を架けているのだよ。」

私は、現在の会社を創業して本年で45年を迎えます。

いつも「ていねいな生き方」「ものごとにけじめをつける」「精一杯の努力」「熱闘」等々を標榜して公私ともに生きてまいり、年齢をひとつひとつ重ねて来て、当然の如く様々な経験をし、そして学んでまいりました。これからもしっかりとこうした生き方を継続して行きたいものと考えています。一方、未来ある若者のためになお一層「人橋を架ける」ことに努めてまいりたいものと思っております。

つきつめれば、私は人が大好きで、人こそ人生最大の喜びの源泉だとの思いの深い今日この頃です。